



## 👁️👁️ みどころ

村人たち11名はチベットの聖地ラサへの巡礼を決意！「五体投地」によるその距離は、何と2400km。さて、そのロードムービーは・・・？

フィクションでもあり、ドキュメンタリーでもある本作の映像が訴えかける真実と迫力はすごい。何ごとも、あるがままに・・・。

政治テーマとしてのチベット問題はさておき、たまには、世俗にまみれた心を洗い流せるような、こんな映画をじっくりと！

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

## ■□■第六世代の旗手、張楊監督の新たな挑戦に注目！■□■

1967年生まれの張楊 (チャン・ヤン) 監督は、賈樟柯 (ジャ・ジャンクー)、張元 (チャン・ユアン)、婁燁 (ロウ・イエ) 等と並ぶ、中国第六世代監督の旗手の一人。私は彼の『こころの湯』(99年)、『シネマルーム17』(162頁参照)、『胡同のひまわり』(05年)、『シネマルーム11』(192頁参照)、『グオさんの仮装大賞』(12年)、『シネマルーム32』(62頁参照) を鑑賞しているが、いずれも素晴らしい作品だった。これらはいずれも劇映画だが、今回の『ラサへの歩き方 祈りの2400km』はドキュメンタリー！

タイトルとチラシを見た時私はそう思ってしまった。実際に本作を鑑賞しても、登場人物は全員俳優ではなく、張楊監督が奇跡的な出会いを経て、映画への出演とラサへの巡礼の両者をOKしてくれた人たちだ。また、撮影についても、ドキュメンタリー的手法をたくさん使っている。冒頭に登場するカム地方と呼ばれるチベット高原の東南部地域にあるマルカム県プラ村での農業と牧畜の生業に精を出す村人たちの姿の撮影は、まさにドキュメンタリーだ。

他方、本作の主人公となる50歳のニマが、70歳になった叔父のヤンペルを連れてラサ巡礼の旅に出る決意をするところから始まる本作のストーリーや、その意向を受けてケルサン一家の長女である24歳のツェリン、その夫のセバ、ツェリンの妹である19歳のツェワンたち、さらに、かつてはトラックを購入して運送業をしていたジグメヤとその妻のムチュ、二人の末娘であるタシ・ツォモたちが旅に参加したいと言い始めるストーリーは、張楊監督のアイデア（構想）通りだが、実際の巡礼の旅の撮影はアイデア通りに進むはずはなく、現実の旅に合わせてドキュメンタリー的に撮影が進んでいくことになる。

プレスシートにある「制作ノート」の中で、張楊監督は次の通り語っている。すなわち、

「何作も経験していれば、映画を1本撮ることは決して複雑なことではない。しかし、この映画を撮ることは、とても重要なことだった。この映画は、映画の可能性をさぐる意味合いを持っていた。映画はこのように撮れるものなのかどうか、それは私にとって非常に大きな試みだった。

試みは、技術の進歩と不可分だ。フィルムの時代なら、絶対に実現できなかっただろう。現在のようにデジタル化し、全ての設備や機器が少なくなくて済み、軽量化、小型化が進み、撮りながら編集ができる、そんな環境でこそ、こうした映画が完成できた。将来、再びこのような映画を撮るだろうか。その可能性は大いにあると私は思う。この映画が新たな考え方、新たな創作方法を示してくれたのだから。」

そんな張楊監督の新たなチャレンジに拍手を送りながら、本作をしっかりと鑑賞したい。

## ■ 1600kmと2000マイル vs 2400km ■

日本にお遍路さんやお伊勢参りがあれば、アメリカにはPCT（パシフィック・クレスト・トレイル）がある。それを映画化し、リース・ウィザースプーンが第88回アカデミー賞の主演女優賞にノミネートされたハリウッド映画が『わたしに会うまでの1600キロ』（14年）だった。そのルールや、主人公がなぜそんな一人旅に出たのかについては、同作をしっかりと鑑賞したい（『シネマルーム36』197頁参照）。また、ミア・ワシコウスカが主演した『奇跡の2000マイル』（13年）も、ラクダの大好きなヒロインが無謀にもオーストラリアの砂漠を越えて西の海岸まで2000マイルの旅を目指す映画だったが、その出来はイマイチだった（『シネマルーム36』未掲載）。

それに対して本作が描く巡礼の旅は、ニマをリーダーとする11人の村人がチベットの小さなプラ村を出発して聖地ラサとカイラス山への、はるか2400kmの距離を“五体投地”をしながら、ほぼ1年かけて歩くもの。11名の大所帯は老壮青男女で構成され、男女比もほぼ半半ずつだが、彼らは一体何を求めてそんな2400kmの旅に・・・？

## ■□■チベット仏教とは？ラサの巡礼とは？五体投地とは？■□■

エルサレムは、キリスト教、ユダヤ教、イスラム教共通の聖地。他方、メッカはイスラム教最大の聖地だ。去る6月3日に死去したプロボクシング元世界ヘビー級チャンピオン、モハメド・アリ（カシアス・クレイ）の思想形成に大きな影響を与えた、黒人解放運動のリーダーであるマルコムXを主人公にした『マルコムX』（92年）では、そんなメッカへの巡礼の旅が描かれていた。また、『サン・ジャックへの道』（05年）は、3人の兄弟が遺産相続をするために、やむなくフランスのル・ピュイからスペインの聖地サンティアゴまで約1500kmの巡礼路を歩く物語だった（『シネマルーム13』290頁参照）。

それに対して、本作はチベット仏教の聖地であるラサへの巡礼の旅を描くものだが、その最大の特徴は「五体投地」にある。「五体投地」とは、両手・両膝・額（五体）を地面に投げ伏して祈る、仏教でもっとも丁寧な礼拝の方法だが、ラサまでこの五体投地をしながら進んでいくのは大変。そのためには「手板」と「皮の前掛け」が不可欠の道具だが、額にこぶがでるほど地面にすりつけて礼拝しながら進まなければならないから大変。チベットには今もラサへの聖地巡礼を五体投地で礼拝しながら、長い時間をかけて進んでいくたくさんの人々がいることを私はテレビを見て知っていた。これは「しゃくとり虫のように進む」と説明されていたが、本作を観ていると、その大変さがよくわかる。五体投地をしながら100mも進めば身体の内臓が痛くなり、悲鳴をあげそう。そんな五体投地をしながら、何と2400kmの距離を歩くのだから、その過酷さは驚異的だ。

本作を観てチベット仏教に興味を持てば、この意味合いをしっかりと勉強したい。

## ■□■何事もあるがままに、だが・・・。■□■

ニマをリーダーとする巡礼の旅の構成員が、張楊監督の構想通りの11名になったのは奇跡的だが、巡礼の旅の途中で何が起こるのかは、張楊監督の想定外の範囲外。巡礼の途中でツェリンとセパの間に赤ちゃんが生まれたのは演出ではなく本当の話だし、その出産の撮影も本当だから、これはドキュメンタリー的。それに対して、本作ラストに登場するヤンペルの死は・・・？

それはともかく、本作に見る巡礼の旅ではさまざまなハプニングや事故に遭遇することになる。川のように水で溢れた道路にも果敢に五体投地で挑んだのは「小さなハプニング」だが、落石のアクシデントに遭ってジグメが脚に怪我をしたことや、交通事故によってトラクターが潰れてしまったのは「大きなハプニング」だ。巡礼の旅には厳格な日程は不要だから、ジグメの怪我については皆で数日休み、治った後にまた巡礼を続けることで解決したが、車軸が折れてしまったトラクターは使いものにならないから、一行は荷台だけを押し進めることに。つまり、荷台を押し進めた距離は五体投地をしていないため、トラクターを押し進めた男たちはまた押し始めの位置まで戻り、そこから五体投地をするわけだ。

もちろん、ズルをすることはできるが、そんなことをすればここまでの巡礼がなかったことになってしまうから、誰もそんなことをする人はいない。

弁護士の私が見るに、この交通事故は外国人を乗せたガイドが運転する車が、トラクターに追突したものだから、過失は一方的にガイド側にある。ところが、平謝りするガイドから、追突の理由が高山病の呼吸困難らしい外国人を早く病院に運ぶためだと聞いた一行が、このガイドを咎めることなく、病院へ急げと見送る姿を見てると、私は啞然。保険会社側の代理人として、交通事故の示談折衝事件や損害賠償の裁判事件を多数扱っている私の仕事は一体ナニ？一瞬そう考え込んでしまったほどだ。何事もあるがままだに……。その延長線上で、交通事故が起きればそれも仕方なし、それも神様の思し召し。そう考えて、ニッコリ笑って別れることができればいいことはわかっているが……。

2016（平成28）年7月13日記